お晝から私は子供とお弓場に行つた。本校を見るといふ事が私には譯もなく嬉しく子供よりも勇んでるのが自分ながら可笑しかつた。

第二一日

今日は私の机の子がみんな揃つた、七人の子を守つて椅子によると俄に大人になつた樣な感がする。潜めるマザアレーの氣分が微笑ませる。今摺紙が初まつた。K先生がお客樣を連れて入つていらしつた。始生叔父樣らしい笑をたゝへていらしつた。

「先生風船を折つて下さい」「先生僕も風船」「私にも風船」。

四方からせめ立てられても先生は摺方をテンデ知らない。早速ほんとの先生に馳けつけて折つて頂く一人の子には「いゝもの折つてあげませう」なんて帆かけ舟で御免を被つておく。一人の子は飛行器だなんて得体の知れないものを折つてさつさと外に逃げて行つた。

砂場では電車ごつこが大流行、木片に砂をのせて藤の葉板を二本さす、それで象徴的な電車が出來上つた。

「チリン〳〵動きまあす、品川ゆき〳〵」。

なんてやつて居る。葉板の棒を前後に四本さして居るのがある。「可笑しいぢやありませんか」かういふと「先生、甲武線ですよ」。何時の間にか運轉手は工夫に變つて居る。車庫やトンネルが作られ初めた。

「先生お團子」柔らかな形のお團子が二つ桝の中に入つて居る。そしてそれには赤い煉瓦をすつた粉がふりかけてある。「ありがたう御馳走さま」につこり笑つて歸つてゆく子の白いエプロンは砂だらけである。かう土に親しむといふ事が私には何だか嬉しい樣な悲しい樣な感がする。人間は土に生れて土に歸りゆく。ロマンテックな天上の夢ばかり見て居る人は生存競爭には堪へ得ないのである。

「先生はお母樣よ、煉瓦をかいて下さい、ね先生」。

何だか極りが惡くなつてあたりを見廻したが誰も居なかつた。「お母樣はそんなに遊んでちやいけないぢやございませんか、ねえ」急製のお母樣は閉口して了つた。

今の教生と元の教生

A「此頃幼稚園は何う?」

B「よくつて〳〵堪らないの、私幼稚園が嫌だといふ人がわからない。卒業したら自分で幼稚園を立てゝ園長兼媒姆兼小使になつて見たい。そして婆やを一人おいて」

C「お母樣をよんで來ればいゝぢやありませんか」

B「でも私、婆や(一寸節をつける)と呼びたいの」

A「立てられない事もないでせう。今あなたのお机にはどんな子が居るの?」

B「T、O、N、Aあんな子が居ますよ。」

A「Tは默つてるのでせう?」

B「でも此頃は何でも私に話す樣になりました。かあいゝ子ね。一文字にキユツト口を結んで。」

A「私あの子を何うかして活潑に遊ばせたいと思つて隨分心配して見たけれど餘り手をかけるといけない樣だからおしまひにはなるべく放つておく樣にして居ました」

B「えゝあの子は一人がいゝの。隨分氣が長いけれど終までよくやつてるんですもの。此頃はね私が何處に居てもたづねて「先生お砂場」つて引ぱつてゆくの。此間ワツと泣いて來たら可哀さうで〳〵私も一緒に泣いて了つたの。何てかあいゝ子でせうね。O先生もあの子が可愛くつて堪らないんですつて。「Tさん來たナ」つて仰有るとニコリともしないで口をキリツと結んで了ふの。だから私「先生いらしつちやいけません、此子は大人が禁物ですから」と申上げると先生は「大人が耻しいなんて中々洒落れてる」つて笑つてらしやるの。「叔父さんがいらしつたつて一文字よ。」

B「ほんとにだんまり屋ね、でもTがあなたのお机でほんとに嬉しかつた。電車ばかり書くでせういつもね。何故あゝ電車に興味があるんでせうね。いつか「Tさんあなた又電車?」つて云つたらお船を一つかきましたよ。男の子は電車、汽車、軍艦あゝいつた動くものに馬鹿に興味があるのね、それから飛行器」

B「Tが此頃そりや洒落れた象をかきますよ、お父さんにきいたんですつて。」

A「まあさう、見たいこと。Tにはちつとも遇つた

事がないのですよ。此間OとIとNとEとがかけて來てね、いくら放して頂戴つてもきかないでね、どう〳〵袖付をほころばして了つたんですよ。可愛いのね、Kは人なつこくない子ね、先生から避けて許り居るんですもの」

B「Kも此頃は勢力がなくなりましたよ。」

A「Kがリーダーなる所以がたゞ睨むといふ一つにあるといふ事が可笑しいぢやありませんか。あゝした子供の社會にも悲しいいたましい事が行はれてると思ふとゾッとしますね、いつかね。お砂場で三人ばかり山をこさへて頂上から毬ころがしをやつて居たの。「僕が一等、二等がA君、T君は弱いから一番あと」かういつてたのを聞くと涙がこぼれる樣でした。原人的の生活が隨分見られるんですもの。力の弱いといふ事が子供にとつてどんなに情けない事でせう。さうした壓迫をうけて居る子は大人になつてから幼年時代の喜びといふ事を思へるでせうか。だから私はまづ力の强い子にしてやりたい、精神的にも身体的にも。」

B「けれど其中に又優しみがなければ駄目ですね、Mは亂暴だけれどさうした優しみのある子ですよ。」

A「あの組の男の子にはさうした優しみを持つてる子が隨分ありますね、Oは、よくお姉さんが來るんですよ、お姉さんなんていふと隨分大きい樣な氣がしますけれどね、尋常一年なの。さうするとOは喜んで〳〵一緒に本を見たり手をつないで歩いたり他の子と遊びはしないの。私それが涙の出る程嬉しかつたの。Sもさうですの。お姉さんが小學校に居るんですよ。いつか何と思つたか默つて入つて行つてお姉さんの傍にぢつと立つてたんですつて。可愛いぢありませんか。私はほんとにさうした奇麗な優しい心持を養つてやりたいと思ふの。Iもかあい子でせう？目をクル〳〵さして。」

B「えゝほんとに可愛の、此頃は何でもする樣になりましたよ。Aも毎朝なかないし……」

A「まあ嬉しいこと、みんながだん〴〵よくなつて行きますね。」

教生室の窓より

いづみ

□ある意味に於て、三年六ヶ月の學科生の時よりも一層得る所のあつた教生の生活、たゞ學ぶよりももう一歩先迄踏み出す所に望もあり面白味もあつた教生の生活、規律の中に快い自由を見出し得たこの十四週間は實に私にとつて永久に忘れがたい時である。女學校もたのしかつた。幼稚園も平和であつた。小學校もうれしい。絶えず流れ出る感謝の思の中に今や私の教生生活は終を告げ樣として居る。書き出せば限りもない。こゝにはたゞ女學校で特に感じたことを日記の中からぬき出して記しておきたいと思ふ。

□殆ど傳說的に傳はつて來た教生といふものゝ一面を今度は見なければならないのかと、教へる事に對して以外に抱いて居た一種の豫感は全くむだな事であつた。私には今迄の人がどこがいやだつたのか、何がつらかつたのか少しもわからない。教壇に立つて居る間、私は實に愉快であつた。すなほな鳩の樣な少女達の眸がみんな自分の方に集つて居る。こんな時にはいつも目に見えない所で、心と心とが美しくとけ合つて居る樣な氣がしてほんとにうれしかつた。運動場では罪のない事を言つては笑ひころげて居る。いかにも明るい光の中に育つた人達だといふ事をしみ〴〵感じさせられる程この人達は晴やかな氣持と純な心とを持つて居る。地方の子には決して見出し得ぬ美しい快さをこの人々は備へて居る。私はこの人々がいつ迄もこの明るい氣分を失はない樣にと祈つて居る。

□ある日、ある級の國語を見てつく〴〵思つた。私はどうにかして女學校の國語をもう一段上のレベルまで押し上げたい。そして又こんな斷片的なもの許りでなくも少し連續的なものをも讀ませたい。ドイツの小學校等でウイヘルムテルの類をテキストに用ひるといふ事は屢お講義の時にも伺つて羨ましく思つて居たがこゝに至つてます〳〵それを感じる。同時に日本文學の貧弱である事が悲しく、漢字だの假名遣だのいふものがうらめしい。これは自分がこれに通じても居ないくせに口にするのは少々をこがましい次第であるが。それでも「おぼしき事いはぬは腹ふくるしわざ」であるから。これあるが爲にどれ